

漢法苞徳塾資料	No. 203
区分	論説・総論
タイトル	東洋医学論…貫抜かれている古典
著者	八木素萌
作成日	1992.05.17 入門講座（10期）レジメ

◎鍼灸医学は、体表から微細な刺激をあたえて体調が変化させられる事を、意識的に運用して疾病を治療する医学である。これは、東洋医学の治療手段のうち湯液治療と並ぶ重要なもの基本的なものである。そして、この医学を成立させているものは、まさに東洋医学の理論的構造そのものであると言える。その考え方の主要なものは次のようなものである。

- a. 生命と言うものは、それが動態構造論的に平衡されている事が、生きて生活して行けるものである事・暮して行けるものである事と把握している医学（中医学では整体観の医学であると主張している）。
- b. 体調の変化は体の表面に現象されていると認識しており、体表の種々の変化を精密に把えて変化の内容を具体的に診断することが出来るという理論と方法を持っている医学（中医学は臓象学説と表現する）。
- c. 臓腑経絡の体制が動態構造論的平衡を保証せしめているものであると認識している医学（中医学は臓腑経絡学説と表現し、整体は臓腑経絡学説の運用によって保持されると言う）。
- d. 健康に生活している状態、つまり、臓腑経絡体制が十全に機能している状態は、この体制を型造っている成分としての衛気榮血、この体制を機能せしめる内容的なものでもある衛気榮血、この状態に密接に関連すると言う医学（五体・臓腑と気血の学説、あるいは気血津液学説、或は衛気榮血学説と言われる）。
- e. この体成分（気血学説・気血津液学説・衛気榮血学説などで把えているもの）は、「先天」に摂承しているものと「後天」によって養われたものが融合しているものである、後天の養いと精を大切にすることによって、「先天」に稟承したものが出来るかぎり耗損されないようにするのが養生である。このためには、命は三才（天人地の事）によって生じ、養われ、生かされ、そしてまた三才の戻るように死んで行くものであり、人のあらゆる事象は自然の諸事象になぞらえる事ができるものであり、また人と自然とは交互に共鳴し交流しているものである、と言うことを覚悟して暮すこと言う「三才思想」の医学、故に、この三才の意味に従って診察し治療し養生せしめるという医学。
- f. これらの事象を解釈したり、現象を研究したりするもの等を買っている方法論と観念とは、陰陽五行学説と呼ばれているものである。

これらを概括すれば、東洋医学の

- a. 整体観の医学
- b. 臓腑経絡学説の医学
- c. 蔵象学説の医学
- d. 衛気栄血学説の医学
- e. 三才思想の医学
- f. 陰陽五行学説の医学

などと特徴付けられる面が、「体表から治療する医学」を支えているということである。

◎東洋医学復活の背景

明治政府の医制改革によって、公的な制度からも公教育からも締め出されてしまった為に殆んど滅亡していた東洋医学が復活するに至った事情は、太平洋戦争（第二次世界大戦）の中期後期に、日本では医薬が不足して医療に差し支えが生じて来た事に関連していた。至る所に生えている草木や獣虫や土石（鉱物）の類を用いて治療する医術、また、一本の鍼とひと握りの艾があれば、極めて多くの疾病を治療できる医術、これに頼らないわけには行かなかったのである。それが昭和の所期に東洋医学が復活した重大な理由であった。このチャンスを僅かに生き残ってきていた東洋医学者などが最大限に生かした。それが戦後まもなく東洋医学を喧伝させて「第一次ブーム」の元になった。鍼灸医学にとってもマッカーサーの禁止の動きに反対して合法性を確保した事、戦前の「取り締まり規則」が戦前の法制の崩壊に伴って消滅して、新しい法律に基づくことになっていったが、やはり、旧制度のくびきから開放された状況のもとで、一つのブームであったと言って良いだろう、戦後の最初の注目すべき研究もこの時期に発表された（丸山などの「経絡の研究」は後に中国に「経絡敏感人」による経絡的な反応の実証的研究を生んだ、また、赤羽法、中谷の「良導絡」なども見られる）が、これ等は重要なものであった。「鍼麻酔」の成功を掲げて、中国は世界中に大々的に宣伝し、また、プロパーを派遣した、実は我が国では中国が成功する数年前（二年前の東洋医学会に報告されている）に産科で成功していたが、一般にも医学会にもさして注目されなかった。この中国の鍼麻酔は、鍼治療への大きな関心と期待とを呼び起こした、これは「第二次ブーム」である。

（エンドルフィン＝脳ホルモンの研究・レーザーの鍼治療への利用・磁石の貼付療法など）

今は「第三次ブーム」と言えるであろう、これは最近の都の調査・医師会の調査、その他関連機関の調査などによって明らかであろう。このブームの背景は現代の医療に対する不安と不信とにあると言って良いだろう。

◎あらゆる民族医学（伝統医学）の中で、創草期の基本骨格を牧取して次第に発達しており、現代医学と対等に対峙しているか、将来に向けて医療の中核的存在になる可能性を持っている医学であろうと考える人々が見られるのは、東洋医学・或は中医学または漢法医学とも言われている医学のみであろう。

◎人間の認識の歴史的な発達の問題と、ニューロコンピュータの開発の過程で明らかになった事について～～

- a. ニューロコンピュータの「並列分散処理モデル」の「認識の表現は多数の構成単位の集団としての活動パターンそのものであり、また、計算では、シナプスを媒介してあるパターンから別のパターンへ、パターンを変換している」「神経ネットワーク・モデル（コネクショニスト・モデル＝並列分散処理モデル）は、むしろ、神経組織をもつ生物のように、多くの実例から共通性を抽象し、一般化して、新しいケースに対応することができる。その学習能力の鍵は、シナプ스에相当する重みが、少しずつ修正される点にある。」それは「たとえば、ソナーのエコーから、岩と金属とを区別するように訓練することができる」このモデルがフォンノイマン式と最も相違することは「脳は並列処理機であり、多くの相互作用を、多くの異なるチャンネルで同時に行なっているのである。さらに、自然淘汰の結果、遅いけれども正確な解答よりも、おおざっぱでも速い解答の方が重視されている。」とカリフォルニア大学の哲学科教授のパトリシア・スミス・カークランドがサイエンス誌の論文のなかで書いている（サイエンス日本版の、1989・9月号―翻訳は松下充彦）
- b. 語彙概念の変化を歴史的に追いかけてみて理解できることは、原初的なものはきわめて大雑把であるが、後代にその概念から生じてきたものの全てを娠んでいるということである。原初的な語は概略的な概念であるが、あらゆるものが包括されており、また、簡約的であらゆる方向性を内包しているだけに、ズバリと核心を突いているとも言うことが出来よう。
- c. パトリシア教授がニューロコンピュータの特質について描きだした論は、ヒトの認識が発達する様相に似通っている、そして、ある語の語彙概念の歴史的な変化を貫いているものを、認識論の抽象と学習と言う事柄を判からせると言う示唆に満ちている。
- d. このような抽象と学習は、生命にあっては自らの生存と繁殖の目的に合った行動や状況に対する対応の為に役立っている。そこに生命における神経の意味があるのである。見て・触れて・におって・かじって・聞いて・等の「五感」から得られた情報の蓄積から抽象と学習とが行なわれて行く。つまり、経験から学ぶ、間接的な経験からも学ぶ、このような抽象が知識となり、知識は体系化されて「理論」となり「学問的な知識」にも進みうる。
- e. ヒトの話聞いて、関心を持ったことを調べて、知識は深く進んで行く、間接的な経験や間接的な調査は、個人の及び得なかった部分の認識をもたらして、知識を一層進めて行く、言葉と図は、この間接的な経験や調査を、ある個人・あるグループに、その知識を広くさせ深めて行くうえで、大きな役割を果たしている。大雑把であるが決定が速いし次第に正確度を増して行くのが神経機構の役割であるが、一見取り付きやすい概略的な事から、底知れぬ深遠さまでを、東洋医学とその臨床は持っている。
- f. 第五世代コンピュータ（ニューロコンピュータ＝並列分散処理モデル）の研究は、抽象（多数の情報重要＝故に、情報の量と質の問題となる）と学習の程度に応じて対応の正確の程度が生じてくるのが、知識は抽象された情報の蓄積されているものと言うことが出来るので、初めて明らかに浮び上がらせて来ていると言えよう。

- ◎現代医療制度と基幹的な医学〈現代医学・西洋医学〉が解決を迫られている問題は、チーム医療と大型の医療器械類と各種の検査器械・生命維持装置・治療器械の多方面にわたる問題、病名確定までの対応の問題、病源主義と排除切除対応の原理、薬の副作用と医原病、などに絡んでいるものである。そして、ここに存在する問題が、実は、「第三次の漢法ブーム」の背景になっている問題なのである。
- ◎漢法医学を学ぶ上で慣れる必要があるものには、これまで馴染みがなかった専門用語の語彙概念の問題（これは専門辞書の利用で解決する）と、特有の思考形式の問題（帰納的・集約的・推論的・類推的・集合論的・機能重視的・弁証論的であり、高度に論理的である）、独特の基底的概念の問題（生理的機能単位のセットとして、また多くの生理的現象が集約されるものでもある五臓論・三才的にかつ陰陽五行論的に表現され解釈される、ほか）等がある。